



ぷらっとシネマ アーレントの沈黙、曖昧、矛盾は？『ハンナ・アーレント』(M・V・トロツタ監督)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 萩原, 弘子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10466/15436">http://hdl.handle.net/10466/15436</a>



## アーレントの沈黙、曖昧、矛盾は？

### 『ハンナ・アーレント』(M・V・トロッタ監督)

ナチス親衛隊で要職にあったアイヒマンが、1960年、逃亡先のアルゼンチンで捕捉された。翌年、彼の戦争犯罪を裁く裁判がイスラエルで開かれる。世界の耳目を集めた裁判の傍聴記者席にハンナ・アーレントはいた。絶滅収容所にユダヤ人を移送する責任者であったアイヒマンの裁判を傍聴、取材することは、アーレントの強い希望だった。傍聴記を寄稿する約束で『ニューヨーカー』誌特派員となる。夫は、彼女の傍聴に反対していた。渡米前の1930年代、アーレントにも短期間だが捕囚の経験があった。アイヒマン裁判でナチスの暴虐と向きあうことで、かつてアーレント自身も負った心の傷が深まりはしないかというのが、夫の心配だった。しかし彼女は強い意志をもって、イスラエルに向かう。

エルサレムの法廷でアイヒマンの証言を聞いたアーレントは、同法廷が出すと多くの人が予測ないしは期待していた有罪、極刑という筋立てには同調しない。彼女の眼には、アイヒマンは極悪非道の凶悪犯罪者ではなく、命令に従っただけの凡庸な小役人と見えた。熟考し、重い筆を励まして書きあげた記事は厳しい批判にさらされるが、彼女はゆるぎなかった。裁判は、アーレントの思想的立脚点を定める重要な出来事となる。

V・トロッタ監督の作品に登場するのは、「考える女性」である。『鉛の時代』(1981)でも、『ローザ・ルクセンブルグ』(1986)でも、女性主人公は能動的に考える存在だ。本作のアーレントはそれ以上で、考えることでこそ、凡庸な悪における無思考に抗しようとした思想家である点が強調されている。しかし鑑賞後、私には不完全燃焼の印象が残った。考えることを重要とするなら、難しい情勢のなかでアーレントが考え、選択した立場の複雑さ、曖昧さも含めて伝えるべきだろう。

本作で中心的に描かれているのは、アイヒマン裁判を見て「悪の凡庸さ」を言ったアーレントの勇気である。一人の男を悪魔として断罪しよう、そうするのが正義だという見解が圧倒的な力をもつなか、彼女はそれに賛同せず、アイヒマンの凡庸さこそが巨悪を支えたということに向きあうほうが、困難だが重要だと考えた。アーレントの記事をアイヒマン擁護の弁と受けとって、離れていくユダヤ人の友人もいた。旧友のユダヤ人哲学者

ハンス・ヨナスは決別を宣言して去った。シオニズム運動のリーダーでイスラエル在住の知人ブルームフェルトは死の床を訪れたアーレントを拒絶して亡くなった。イスラエル政府は彼女の言論活動に警戒して圧力をかけてきた。

こうした描写から観客は、アーレントがユダヤ人としてではなく、人間として、より普遍的なレベルでユダヤ人に対する暴虐を捉えた、その点で優れていたと考えるのではないだろうか。観客の頭のなかには、「アーレント VS シオニズム」という構図ができあがる。映画パンフレットにある識者の解説も、「彼女自身はシオニズムには傾倒しなかった」としている。しかしこれはアーレントについての理解としてはっきりと誤りである。

たしかにアーレントは、シオニズム右派に対する容赦ない批判で知られる。しかし、アーレントとシオニズムの関係は単純ではない。1930年代、彼女自身がヨーロッパのユダヤ人をパレスチナに送りこむ活動に参加していたし、第3次、4次中東戦争の際にはイスラエルを強く支持していた。イスラエル建国の1948年以前には、ユダヤ人国家建設を進める政治的シオニズムには反対していたが、その強い論調は建国後には消えた。自身がイスラエルに「帰還」しないことでイスラエルとは距離を保ったが、30年代に関わったキブツ入植・移送事業がイスラエル国家建設の土台となったことについての省察には向かわなかった。アーレントはシオニズムを外から批判したことはなく、シオニストであった。

映画では言及されていないが、彼女のアイヒマン裁判論の重要点は、ほかにもあった。たとえば、イスラエル秘密諜報機関モサドによるアルゼンチンでのアイヒマン捕捉と連行の不当性という指摘と、イスラエル国家の審理権に対する疑問である。アイヒマンの犯罪行為がなされたときには存在しなかった国家が、捕捉、連行、審理の権利をもつとする根拠は、それがユダヤ人国家だからということに尽きよう。つまりアーレントは、この裁判のそもそもの成立に疑問をもっていた。その点にも本作が迫るなら、アーレントの、イスラエル国家についての言説と沈黙、曖昧と矛盾に観客は目を開かれたらと思う。(ドイツ、ルクセンブルク、フランス、2012年、114分)